新名誉会員

伊　木　常　世君
（トピー工業(株)常任顧問）

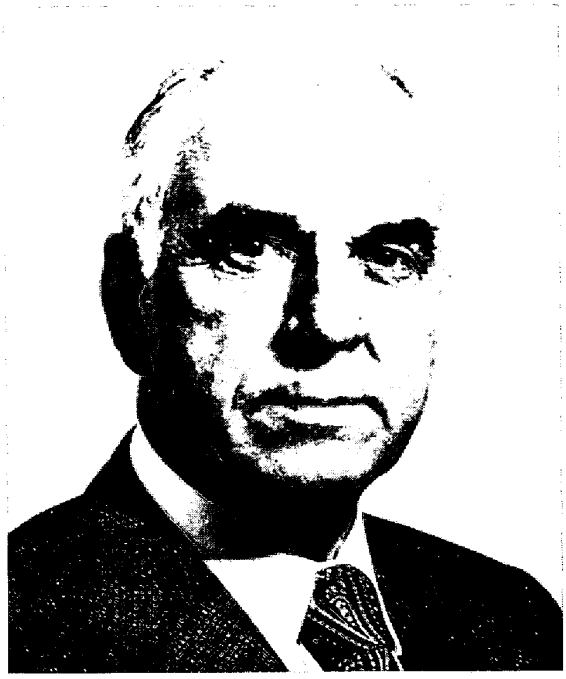
伊木常世氏は明治 38 年東京に生れた．昭和3年東京帝国大学工学部冶金学科を卒業，海軍に入り呉海軍工廠製鋼部に勤務の後，昭和 15 年ドイツに出張し終戦まで製鋼技術の情報収集に当られた．帰国後，日本製鉄嘱託を経て，昭和 24 年東都製鋼に入社，技術部長を経て昭和 26 年取締役，同 33 年常務取締役技師長，昭和 39 年合併によりトピー工業においても代表取締役専務に就任，昭和 40 年5月常任顧問を委嘱され今日にいたつている．

この間海軍時代，兵器用鋼材の研究開発に従事し，特に特殊鋼材の諸欠陥の発生原因と防止対策に関する研究では白点の発生原因とその防止対策について顕著な成果を挙げ，その内容は本会誌「鉄と鋼」にも収載されている．また戦後は東都製鋼において技術面の最高責任者として，大中形異形形鋼の生産技術の開発に全力を傾け，自から研究開発した成果を生かして圧延設備，熱処理設備を建設量産態勢を整備した．これによつて，当時品質が不安定で，歩留り生産性の悪かつた建設機械用履板が，品質のすぐれた，生産性の高いかつ低コストで供給できるようになった．

一方業界にあつては，日本鉄鋼連盟から派遣された欧州鉄鋼技術調査団の副団長として参加し，その報告書において，現場技能者教育の必要性を強調し，鉄鋼短期大学開設の緒口を開き，さらに学会の活動について課題が，幅広い事業の推進にあることを指摘した．そのほか日本工業標準化事業については永年各種の委員を歴任し多大の貢献をしている．通産省が昭和 46 年度に設置した「鉄鋼業高温鉱滓安全処理調査委員会では委員長に就任，鉱滓処理の実態，安全対策などの検討を行なつた．

伊木氏は本会にあつては学会活動の先頭に立ち活躍されている．即ち昭和 29 年以降，副会長，理事，監事などを継続的に歴任，殊に浅田会長時代における協会事業拡大強化に当つては，企画委員長としてその具体策を策定し，今日の隆盛の基盤を築いた．また昭和 45 年以降は共同研究会の幹事長として，卓越した識見，豊富な知識ならびに指導力をもつて運営に当つている．氏の協会活動の功績に対して昭和 40 年日本鉄鋼協会事業功労賞ならびに昭和50年日本鉄鋼協会製鉄功労賞が贈られている．

新 名 誉 会 員



ヘルムート・ケーゲル 君
（ドイツ鉄鋼協会専務理事）

ヘルムート・ケーゲル氏は 1914 年 Bochum に生れた．1933 年にフライベルグの工業高等専門学校を卒業後，ミュンヘン工業大学（Technische Physik），フライベルグ鉱山大学，アーヘン工業大学（Eisenhüttenkunde）に学び，研究に専念した．1949年 Oberhausen 製鉄会社に入社，製銑部門の業務に従事した．1952年ドイツ鉄鋼協会（VDEh）に入り，高炉委員会，コークス製造委員会，高炉スラグ有効利用委員会，鉱石委員会の業務を担当した．この間ドイツの鉄鋼会社を集め，研究協同体を組織し技術水準の進歩発展が図られたことは，ケーゲル氏の指導力に負うところ大である．1966 年管理室長，1968 年には VDEh 専務理事に選任された．

またケーゲル氏は，現在 Max-Planck Institut (Eisenforschung) の理事で経理責任者，VDEh-Institut für angewandte Forschung, VDEh-Gesellschaft zur Förderung der Eisenforschung 等の最高幹部の地位にあるほか，ヨーロッパ共同体・鉄鋼技術研究委員会委員としても活動している．さらにケーゲル氏は，鉄鋼技術ならびに学術研究の国際交流の促進，共同研究の推進に尽力されている．1970 年本会が主催した鉄鋼科学技術国際会議の開催を，いち早く積極的に支持し，ドイツから外国として最大の参加者を派遣して，同会議を成功に導く大きい要因をなすとともに，同国際会議の第2回目 “International Congress of the Iron and Steel” の開催をドイツにおいて引受け，これを国際的な重要行事として定着させた．また同時期に日独鉄鋼協会共催によるセミナーを企画実施されたが，これは今回の第2回日独セミナーの東京における開催によつて体制を確立し，日独両国間の鉄鋼の学術技術交流の新しい道を開いた．

ケーゲル氏の幅広い活動と業績に対して，Der Eisenhütte Österrich では，1973 年氏を名誉会員に推挙している．